

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 256

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 5101. 魔神の温もり
- 5102. 近々訪れてみたい幾つかの水の都
- 5103. 来年の初旬の旅行計画と今朝方の夢
- 5104. 数日前にフローニンゲンの街の中心部で起きた殺人事件について
- 5105. この世界の美化に向けて
- 5106. 今朝方の夢
- 5107. 本日のボルダリングに向けて: 書道道具か筆ペンの購入の検討
- 5108. 読書の秋あるいは読書の冬に
- 5109. ボルダリングの進展
- 5110. 継続の大切さを教えてくれるボルダリング
- 5111. 改めて実感するボルダリングの楽しさと奥深さ
- 5112. 空気の綺麗な場所での生活について
- 5113. 「先生」と呼べる人物を持つことの有り難さと大切さ: 人間関係のフラットランド化に抗って
- 5114. 不幸が続くフローニンゲン: 生と死の存在と非在について
- 5115. 今朝方の夢
- 5116. 飛行機を用いた長旅に関する実験
- 5117. 楽しみで始まり、楽しみで進行し、楽しみで終わる日々
- 5118. 今朝方の夢
- 5119. 未来の世界の形、「大きな便り」、不思議な言葉ゲームに関する夢
- 5120. 書道への関心: デッサン的な作曲実践

---

## 5101. 魔神の温もり

—魔神的なものとは、悟性や理性では解き明かし得ないものことだ。それは好んで薄暗い時を選ぶものさ。ベルリンのような明るい散文的な都市に現れる機会は滅多にあるまいね—ゲーテ

イタリアで生まれたピアノ曲をイタリア人のとあるピアニストが演奏している音楽に耳を傾けている。来週末から訪れるヴェネチアでは、このピアノ曲集を静かに味わいたいと思う。

今日は気がつけば、9曲ほど小さなピアノ曲を作っていた。本当にピアノ曲を作って作り続ける日々が続いている。こうした日々がいつまでも続いてほしいと静かに願う。本当は毎日10曲ほど作りたいたのだが、今の自分の技量と集中力の容量ではそれは難しい。焦って10,000曲作る必要はない。確かに10,000曲の習作を作って初めて、自分なりの作曲語法がようやく見えてくると思うのだが、そこに至るまでのプロセスを焦ってはならない。一つ前の日記で書き留めたように、成長の等高線上の歩みは緩やかなのだから。

夕方、曲を作っている最中にふと、作曲とは本当に音で空間を作っているのだとわかった。音は時間を常に包摂しており、時間と空間の関係上、曲を生み出すというのは単にそこに音を通じた時間を生み出すのみならず、音を通じた空間を生み出すことにもなるようだ。

音を聞きながら、私は何か特殊な空間知覚をしているのかもしれない。今後は、より一層空間造形としての作曲を意識してみよう。そうなってくると、普段の生活の中では、建築物を意識的に観察してみよう。来週から滞在するヴェネチアでは、建築芸術をよくよく眺めてこよう。

これまで私は絵画芸術の観賞を好んできたが、これからは建築や彫刻のような空間造形的なものを意識的に鑑賞したいと思う。そういえば、先日実家に戻ったときに、実家のリビングに大事そうに飾られている焼き物などを熱心に眺めている自分がいた。焼き物の味がようやくわかるような感性が育まれてきたのかもしれない。そうした感性が今日の夕方にふと、作曲実践を通じて上記の気づきを生んでくれたのだ。

ああ、小雨がポツポツと降り始めてきた。冷たく真っ暗な世界に雨がしたたる音が響く。

---

ゲーテが述べているように、こうした暗い世界の中に魔神的なものが現れ、それが自分に迫ってくるのかもしれない。見かけだけ明るく取り繕った大都市の中で魔神を見かけることはなく、それを感じることもほとんどできない。私は魔神と出会うためにこの街で暮らしているのかもしれない。

自分が静寂さと平穏さに感謝をし、冷たく暗い世界の中で黙想的にただ独り座していると、魔神は静かに歩み寄ってくる。その歩み、そして魔神の温もりを感じることができる。

今外の世界に降り注いでいる小雨は明日には止むだろう。そしていつの間にか小雨の痕跡は跡形もなく消え去っているだろう。魔神の温もりが、小雨の跡を蒸発させるのかもしれない。フローニンゲン:2019/10/28(月)19:37

### 5102. 近々訪れてみたい幾つかの水の都

今日は珍しく、いつもより随分と遅く6時前に目覚めた。昨夜の就寝が9時半過ぎ頃であったことを考えると、随分と睡眠を取っていたことがわかる。途中で目覚めることもなく、朝まで快眠を取っていた。

今日から三日間、フローニンゲンはずこぶる天気がいい。雲のマークがなく、快晴の日が続く。ただし、最低気温が異常に低くなっており、今日と明後日の最低気温は0度、明日はなんとマイナス2度とのことである。明日はそのような最低気温となるが、日中はなんとか8度まで気温が上がるそうだ。明日は快晴のため、ボルダリングジムに足を運ぼうかと思う。

先週の木曜日にジムに行った時、課題の張り替えを行なっており、ジムのスタッフが述べていた通り、新しい課題に挑戦しに来る人でジムは大賑わいだった。人が多いことを避けるために、今週は木曜日ではなく、明日の水曜日の午後にジムに足を運ぶ。ジムが開く午後2時頃をめぐりにジムに行き、そこから1時間半ほどボルダリングを楽しもうと思う。行き帰りの軽いジョギングと散歩もまた楽しみたいと思う。とりわけ、途中に通るノーダープラントゾン公園の紅葉は深まっており、明日もまだまだ紅葉が美しいだろう。

来週末からヴェネチアに滞在することになっているのだが、昨日、水の都と呼ばれるヴェネチア以外にも、運河が綺麗な街はないかと探していた。すると、別名「オランダのベネチア」と呼ばれるヒー

---

トホルンという村を見つけた。ここは人口2500人ほどの小さな村であり、運河が張り巡らされ、茅葺屋根の趣深い家々が運河のほとりに建っているとのことである。この景観を保護する目的で、この村は車の乗り入れが禁じられており、交通手段はボートと自転車、そして徒歩のみだそうだ。地図を調べてみると、ヒートホルンという村がフローニンゲンから近くにあることを知って驚いた。移民局のあるズヴォレの街よりも近くにあったのである。季節がいい頃になれば、運河を貸しボートで移動するのはさぞかし気持ちいいだろう。春か夏になったら、友人を誘ってヒートホルンの運河をボートで巡るということをしてみたい。

もう一つ水の都として有名なのは、ベルギーのブルージュである。ブルージュもまた「北のヴェネチア」という呼び名が付けられている。ブルージュは中世の街並みが色濃く残る都市として有名であり、街全体がまるで一つのアートのようなため、「屋根のない美術館」とも呼ばれている。そうした点から、ブルージュは街全体が世界遺産に登録されているということも興味深い。

ちょうど来年の2月か3月——とても寒い時期だが——にベルギー旅行を計画しており、その際には是非ともブルージュに訪れたいと思う。世界には、その他にも水の都と呼ばれる街が存在しているようであるから、またいつかそれらの街にも足を運んでみたい。昨日はそのようなことを考えていた。フローニンゲン:2019/10/29(火)06:50

### 5103. 来年の初旬の旅行計画と今朝方の夢

小鳥の美しいさえずりがどこからともなく聞こえてくる。幸いにも、起床した時から小鳥たちは鳴き声を上げており、美しい旋律を伴った音のシャワーを起床直後から浴びることができた。今もまだ何種類かの小鳥たちが鳴き声を上げてくれている。

先ほど、来年の初旬に行く予定のベルギー旅行について少しばかり思いを巡らせていた。当初はアントワープとブリュッセルの二つの都市を訪れることしか計画になかったのだが、街全体が世界遺産に登録されており、街自体が一つのアートとして存在しているブルージュにもぜひ滞在してみようと思った。幸いにもベルギーは、フローニンゲンから電車で行ける距離のため、まずはアントワープに滞在し、そこからブルージュに移動し、最後にブリュッセルに滞在する形で旅行を行いたい。三

---

つのそれぞれの都市に2泊か3泊ほどする形で、その街の美術館に足を運び、街の景観をゆっくり散歩しながら楽しみたいと思う。

オランダでの生活はもう4年目なのだが、隣国のベルギーにまだ足を運んだことがないというのは自分でも驚く。だが近い場所というのは案外そういうものなのだろう。また、私は自分の中で深い関心が湧かないとその場所に行ってみようという気持ちにならず、パリにはすでに2度ほど訪れたが、パリを代表するエッフェル塔はまだ一度も間近で見たことがない。敬愛する森有正先生が教鞭を奮っておられたパリ東洋語学校や、辻邦生先生が住んでいたアパート(デカルト街37番地)になら足を運んだのだが。

今回ベルギーに旅行に出かけようと思ったのは、ベルギーの何かが自分の中の何かと共鳴したからだろう。来年の2月や3月はまだまだ寒さが厳しい頃だが、あえてそうした季節にベルギーを巡ってみるのも一興だろう。

昨夜の日記に書き留めていた通り、春になって暖かくなったらバルト三国にでも旅行に出かけたい。北から順にエストニア、ラトビア、リトアニアと南下して旅行するのもいいし、逆に北上するのもいいだろう。バルト三国に何が待っているのかわからないが、何かが自分を待っているような気がしている。それと出会うために、ぜひ来年の春ごろにこの旅行を実現させたい。

時刻は午前7時を周り、辺りは随分と明るくなってきた。早朝の作曲実践に取り掛かる前に、今朝方の夢を簡単に振り返っておきたい。今朝方の夢はもう随分と断片的な記憶になってしまっているが、まず覚えているのは、私はフローニンゲンではないヨーロッパのどこかの街に住んでいて、今のアパートと似たようなアパートで暮らしていた。

出かけようと思って階段を下り、外に出ると、ちょうど現在のアパートの上の階に住んでいるピアニストの友人も同じアパートに住んでいるらしく、彼女も階段を下りて外に出かけようとしていた。私は少し悪ふざけをして、自分の姿を隠しながら、ドアが開かないように外から押さえていた。彼女は私の仕業だとすぐに気付く、私はドアを開け、お互いに笑いながら目的の場所に向かっていった。そのような夢の場面があった。もう一つ覚えているのは、学校かどこかのトイレにいる夢である。そこはと

---

でも小さいトイレであった。用を足せる便器が一つあり、仕切りが全くなく、誰がおおっ広げに使うのだろうかと思われる便座が一つ、そして仕切りのある便座が一つほどあった。

見知らぬ男性が用を足せる便器の前に立っている姿が見えたので、私は仕切りのある空間に入った。そこで私は用を足すわけではなく、自分のリュックサックから何かを取り出そうとしていた。すると突然、天井から大量のライフジャケットが落ちてきた。私はびっくりし、上を見上げると、次から次へとライフジャケットが落ちてくるような状況だった。

便器の中はライフジャケットで埋まってしまい、次の人のことを考え、私は便器の中からライフジャケットを取り出していった。すると、なんと最後の方に、私が普段ボルダリングで使っているチョークバッグが紛れていることに気づいたのである。それは私にとって大切な物であったから、すぐに取り出し、後から洗濯しておこうと思った。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/10/29  
(火)07:24

#### 5104. 数日前にフローニンゲンの街の中心部で起きた殺人事件について

メルヴィン:「ヨウヘイ、数日前のあの事件は本当に悲惨だったね」

私:「何のこと？」

メルヴィン:「知らなかったのか、街の中心部の映画館で殺人事件があったんだよ」

私:「えっ、嘘でしょ？いつ？」

メルヴィン:「数日前さ。そう、三日前の土曜日の朝さ」

かかりつけの美容師のメルヴィンにその話を聞いて、私は心底驚いた。

今日は午後からメルヴィンの店に行き、6週間ぶりに髪を切ってもらった。いつものようにお互いに共通の話題をしばらく話したあと、メルヴィンが突然、三日前に街の中心部の映画館で起きた殺人事件について話を切り出した。

---

フローニンゲンもオランダでも平和な街の一つであり、この街で殺人事件が起きたことをすぐに信じることができなかった。何より驚いたのは、三日前の土曜日の朝、しかもそれが街の中心部の映画館で起きたことである。この映画館は、今日も足を運んだオーガニックスーパーの真ん前にある。

アメリカに住んでいた4年間において、特に最初の2年半は、私はよく映画館に行き映画を見ていた。だがオランダで生活を始めてからは、映画館に足を運んだことは一度もなかった。そのような生活をしてきたのだが、先日日本に一時帰国した際に、東京で4本ほど映画を見て、フローニンゲンに戻ってからは週に1度映画館に足を運ぶのも悪くないと思っていた。そして私は、その殺人事件が起きる1週間前に、まさにその映画館のウェブサイトに行き、マンスリーパスを購入するかを考えていたのである。

事件が起きる数日前、オーガニックスーパーに立ち寄るがてら、ちょっと映画館の中を見に行くために映画館に立ち寄った。上映されている映画は面白そうなものがあり、マンスリーパスを近々購入しようと思っていた。しかし私は結局マンスリーパスを購入しなかった。その理由は自分でもわからない。映画館の中に入った時、特に嫌な予感はずなかったが、何か私をその映画館から遠ざけた。その数日後、事件は起きた。

メルヴィンの店から出た後に、その事件があったスーパーで普段通り買い物をした。映画館は明日まで臨時休業とのことであり、映画館の一角だけどこか悲しげなエネルギーが流れていた。

犯人はロッテルダムに在住のオランダ人であり、歳はメルヴィンと私と同じく30代前半である。犯人は精神病を患っており、ロッテルダムの警察から以前より監視されていた人物とのことであった。ロッテルダム在住の犯人がなぜわざわざフローニンゲンまでやってきたのか、その明確な理由は定かではないが、以前交際していた女性と彼の娘に会いにきたのではないかということだった。犯人に殺害されたのは、映画館で清掃員として働いていた50代の夫婦である。

犯人は映画館のゴミ箱を漁ろうとしていたのか、何かを盗もうとしていたのではないかとされている。犯人は二人を殺害後、フローニンゲンの街を徘徊し、翌日の朝に、映画館から2キロほど離れたガソリンスタンドで警官に足を撃たれて捕まった。



---

この事件について話を聞いた後、私は自宅でこの事件について詳しく調べてみた。するとインタビューに答えていたある住民が、「この平和な街でまた殺人事件が起きるなんて信じられない」と述べていた。「また」という言葉が意味していることが気になったので、過去にフローニンゲンで起きた殺人事件について調べてみると、半年ほど前に、無差別の通り魔殺人があったということを知った。その犯人はジョギングをしながら無差別で若い女性を刺殺したとのことであった。犯人の似顔絵を見ると、眼がサイコパスに固有の眼であった。

今、自宅の前をパトカーがサイレンを鳴らしながら走り去っていった。フローニンゲン:2019/10/29  
(火)19:36

### 5105. この世界の美化に向けて

友人かつかかりつけの美容師であるメルヴィンから、数日前に街の中心部の映画館で起きた殺人事件について話を聞いて以降、心の中がざわついている。何か妙な感じがするのである。

事件があった当日の朝、メルヴィンはいつものように自宅から自分の店に行き、その際に事件が起こる前の映画館の前を通ったそうだった。その日メルヴィンは、店に到着すると、いつもなら開店前にも店のドアの鍵を開けておくのだそうだったが、その日だけはなぜか鍵をかけていたそうだった。その話を聞いた時、メルヴィンは無意識のどこかで事件を予知していたのではないかと思わされた。

先ほどの日記でも言及していたが、実は私はその映画館に近々足を運ぼうと思っていた。マンスリーパスの購入を真剣に考えていたのだが、なぜかそれを購入することはしなかった。

事件があったのは土曜日の午前9時半頃とのことであり、犯人が捕まったのはその翌日のほぼ同時刻とのことであった。私は事件のあった24時間後に、「旅立った魂」という変わったタイトルの曲を作っていた。その時の私は、事件のことなど全く知らなかった。

妙な胸騒ぎがまだ残っている。この世界にはおそらく、本当の意味で平和な場所などどこにもないのだと思う。それが現代という社会の有り様である。

---

この夏、私はどういうわけか、サイコパスやソシオパスに関する専門書をいくつか購入し、それを読み耽っていた。この世界には、生得的に悪をしでかす人間がいるということに無知な人が多いように思う。私もその一人であった。遺伝的・生得的に殺人を含めて悪をなしてしまう人間が確かにこの世界に存在するという。しかもその数は少なくなく、現代社会の歪な発達により、その数は増加の一途を辿っている。

事件があった翌日、つまり犯人が逮捕された日に、私はこの地球というものが一つの生命体であれば、きっといつか死を迎える日が来るのだろうということをぼんやりと考えていた。しかもそれは本来の寿命を全うすることなく、私たち人間の手によって死が早められてしまうのではないかと考えていたのである。

美学者の今道友信先生は、実践美学を通じて、この世界を少しでも美化することに尽力することが私たちに求められることだと述べていた。美化の形は様々であり、人それぞれの実践領域において、少しでもこの世界がより美しいものになるように尽力することは大切であり、それをしなければ、本当にこの世界は退廃の歩みを進めていき、私たちの地球は本来の寿命を全うすることなく死滅してしまうのではないかと思えて仕方ない。

私たち一人一人は、この世界の美化に向けた実践に真摯に取り組むことができるだろうか。その実践には深い精神性と徳が求められ、何よりも長大な展望を持っていなければならないように思う。というのも、この世界が完全に美化されることなどあり得ない話であり、私たちの実践がこの世界を仮により美しく、より善きものにつながつたとしても、その結果はすぐに出るようなものでは決してなく、おそらく私たちがこの世界から消えた後にもたらされるようなものだと思うからである。だからと言って、そうした実践に従事しないという選択が私たちに残されているのだろうか。そうした選択の余地はますますなくなっている社会に私たちは生きているのではないかと思う。

短期的に見れば完全に無駄だと思ってしまうそうした実践に自らを捧げて取り組むことができるだろうか。それには真の利他心が必要であり、その実践に自らを捧げて取り組む時、自らがこの世を去った後、もしかすると世界は少しだけ美しいものになるかもしれない。もし仮に自分の命に固有の輝きがあるのなら、その輝きを世界をわずかばかりより美しいものに輝かすために捧げたい。

---

真っ暗な闇に包まれたフローニンゲン。とてもとても冷たい外気に包まれたフローニンゲン。街灯の明かりは揺れずしてぼんやりとそこに輝いている。フローニンゲン:2019/10/29(火)20:08

## 5106. 今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えようとしている。今朝は3時過ぎに起床した。外気は1度であり、今日の最低気温はマイナス1度とのことである。起床直後に換気のために窓を開けた時、その冷たさが身に染みした。

今は外の世界がどこか不気味なほどに静まり返っている。昨夜は就寝前に、ゴッホの画集を眺めていた。それは今から一年半前に、アムステルダムのゴッホ美術館を訪れた際に購入したものだ。ゴッホ美術館を訪れたのはその時が2回目であり、その時はジャン・ピアジェ学会での発表のためにアムステルダムに宿泊をしていた。その画集を眺めていると、ゴッホの初期の作品群の物寂しさにハッとするような気持ちになった。ゴッホの絵画から魂の嘆きのような声が聞こえてきたのである。

寂寥感を醸し出す色使い。もしかすると、モチーフすらもがそうした雰囲気醸し出すことにつながっているのかもしれない。

昨日の午後にかかりつけの美容師のメルヴィンの店に行き、彼に髪を切ってもらった。最初はお互いの近況や、ボルダリングやチェス、そして音楽について話をしていたのだが、途中からは先日にフローニンゲンの街の中心部の映画館で起こった殺人事件について話が持ち切りだった。

自宅に帰る頃には夕方を迎えており、もう夕食どきに近かった。夕食後、その事件について調べたり、直近でフローニンゲンで起きた他の殺人事件について少しばかり調べていた。そうしたことが影響をしてか、昨夜は就寝前に、悪についてぼんやりと考えていた。さらには、この世界の美化に向けた実践について考えていた。自分なりの取り組みが何なのかを今一度見つめ直していたのである。

悪についての考えや世界の美化に向けた取り組みについての考えは、大して進展は見せなかったが、ほんの少しだけその考えが一步前に進んだように思える。この世界の美化に向けた自分なりの

---

取り組み、本当にそれは自分にできるごく些細なことではないが、今日もまたその活動に取り組み、活動そのものを深めていこうと思う。

外の世界の闇を見つめながら、今朝方の夢について振り返っている。今朝方の夢の記憶は断片的なものになっている。夢の中で私は、セミナールームのような場所にいた。私はあるセミナーの参加者のうちの一人であり、セミナーが終わるや否や、トイレに駆けつけようとした。しかし、トイレで用を足すのではなく、セミナールームの外には溝があり、男性はセミナールームの脇で用を足せるようになっていた。

不思議なことに、セミナールームを出てすぐのところに男女のトイレがあったがのだが、私はトイレに行くことをせずに、セミナールームの脇で用を足し始めた。セミナーの最中にずっと我慢をしていたのだろうか、用を足し始めると、それが終わる気配が一向になく、知人が私の後ろを通りかかった時、その勢いの激しさに驚いていた。また偶然にも、元サッカー日本代表の選手の、今はあるクラブチームの監督をしている方が私の後ろを通り、「やたらと長いね」と私に声をかけ、笑いながら後ろを通って行った。私もやたらと長いなと思っており、セミナールームから女性が出てくると気まずい感じがしたので、一旦切り上げて、ちゃんとトイレで用を足そうと思った。

そこで私はうまく切り上げて、後わずかばかり残った尿をトイレで済ますことにした。そのトイレはとても小さく、一つの個室しかない。個室の中に入ると、なぜか便器が二つあり、私は一つの便器に腰掛けた。すると、便器の下にゴミ箱が設置されており、その中のゴミが溢れかえっていた。見ると、応急処置用の道具などが捨てられていた。しかもそれらは全て未使用であり、一体誰がこのようなものを捨てたのかと不思議に思っていた。

私は後ほどそれらのゴミを取り出し、別のところで処分をするか、再利用するかを考えていた。まずは一旦残りの尿を出し切ることにし、用を足して水を流したところで夢の場面が変わった。

トイレの中に入る夢はこれで二日連続だろうか。トイレというシンボルはいったい自分の無意識の何を象徴しているのだろうか。それはあまり肯定的なものではない予感がする。フローニンゲン:2019/10/30(水)04:19

---

## 5107. 本日のボルダリングに向けて: 書道道具か筆ペンの購入の検討

今日は午後からボルダリングジムに行つてこようと思う。今日は確かに寒く、日中も8度までしか気温が上がらないが、天気には恵まれているため、午後2時にジムが開くのに合わせて自宅を出発しようと思う。

自宅からジムまでの距離は5kmほどであり、ウォーキングと合わせて軽くジョギングをしながらジムに向かうと、大体30分ぐらいかかる。往復の1時間と、ジムで過ごす1時間半ぐらいの時間は、私にとって大変良い気分転換になる。絶えず自宅にいて、書齋に籠もりつきりというのは精神衛生上望ましくない。

オランダでの生活を始めての最初の2年間においては、フローニンゲン大学での授業や研究がない日はあまり外に出かけることをせず、自宅から外に出なくていいように、買い物の際にはまとまった量を購入するようなことをしていた。しかし、当時を振り返ってみると、それは精神を健全に保つため、そして精神をさらに育てていくためには望ましいことではなかったことがわかる。

今現在は、ほぼ毎日外の空気を吸う時間を設けている。雨の日であっても、近所のスーパーまで歩くようにしており、それは大変良い気晴らしとなる。これから寒さが厳しくなってくるが、大雪や大雨でもない限り、毎日必ず外に出て、自分の足で外の世界を歩き、外の空気を吸おうと思う。

今日は午後の2時からボルダリングを始めるため、そこから逆算してプロテインを摂取していく。運動前と運動中のプロテインの摂取は、運動後の摂取と同様か、あるいはそれ以上に重要であることは以前述べた。

今朝は午前3時に目覚めたということもあり、少し早い起床のため、午前中に普段飲む飲み物の時間や、昼時に食べているバイオダイナミクス農法で作られた4種類の麦のフレークを食べるタイミングについて少し考える必要がある。後者のものを食べる際には、豆乳のみならず、ソイプロテインを少々入れよう。それは先週にボルダリングジムに行く際にも試し、組み合わせとして良かったので今日もそのような形で味わって食べよう。

---

昨日、友人のメルヴィンとボルダリングについて話をしており、12月の第2週あたりに、別の街にボルダリング遠征を一緒にすることになった。彼のパートナーであるスシやその他の友人を連れて、一緒にオランダ国内の他の街のボルダリングジムに行く。おそらくは、以前話をしていたように、ルーワーデンの街のジムに行くことになるのではないかと思う。

話の最後に、12月はメルヴィンとスシの交際4周年記念とのことであり、何か贈り物をしようかと思う。贈り物として相応しそうな絵柄のポストカードか何かを購入し、二人の愛が永遠に続くことを願って、漢字の文字でそれを表現したいと思う。そのために、筆ペンか何かを街のアートショップで購入しようと昨夜考えていた。理想は書道の道具を手に入れることだが、フローニンゲンのアートショップでそれが手に入るのかはわからない。ちょっと探してみよう。

先日日本に帰り、実家に滞在していた時に、偶然にも母から、私が昔書道を習っていたときの作品が出てきたという話を聞いた。実は以前にも書道を再び始めようかと考えていたことがあり、ひよっとすると今はそのタイミングなのかもしれない。本格的に書道を始めかどうかは未定だが、今後誰かにメッセージを送ることがその他にもあることを考えて、少なくとも筆ペンぐらいは購入したいと思う。

フローニンゲン:2019/10/30(水)04:41

### 5108. 読書の秋あるいは読書の冬に

時刻は午後の1時を迎えた。今日は申し分ない天気であり、午後の穏やかな太陽の光がフローニンゲンの街に降り注いでいる。

外気は確かに冷たいが、計画通り、これからボルダリングジムに行つてこようと思う。12月の第2週に、友人のメルヴィンを含め、彼のパートナーのスシを含めて、オランダ国内のボルダリングジムに行く予定となっている。そこに向けて、少なくとも毎週1回はジムに足を運び、楽しみながらにして着実にボルダリングのトレーニングを積み重ねていきたい。

今日の午前中には、日本で購入したボルダリングの理論書に少し目を通していた。ボルダリングは作曲同様に、やってみないとわからないことが多々あるが、理論書から学ぶことも多いことは事実だ。日本で購入した二冊のうち、一冊はかなり本格的な理論書であり、図とともに身体学的かつ物理学的な解説が豊富になさっており、読んでいただけでいろいろな発見がある。音楽上も音の重力を

---

理解することが大切であり、ボルダリングにおいては文字通り物理的な重力を理解する必要がある。また音響学を理解する際に物理学の知識が有益であるのと同様に、ボルダリングの壁を登る際にも物理学の知識が有益となる。

今日もジムで豊富に実践体験を積み、今夜にまたその理論書に目を通したいと思う。体験から入り、それを理論で補強していく道と、少しばかり理論に先に触れておいて、それを体験で確認するという二つの道を大切にしたい。ただし繰り返しになるが、ボルダリングや作曲という実践をしていく上では、何よりも最初の道を大切にすることがある。午前中にはその他にも、コード理論に関する書籍を読み進めていた。これもまた日本で購入したものである。

季節はめっきり寒くなり、秋を通り越して冬だと感じられるが、この冬は、読書体験も再び豊かなものにしていこうと思う。作曲やボルダリングに関する理論書を繰り返し読むこと、そして美学やシュタイナー教育に関する書籍を読んでいくことを自らに課す。それらは決して義務的なものではなく、楽しさの感情に基づいて自発的になされるものだ。そうした書籍に加えて、引き続き森有正先生と辻邦生先生の一連の日記や思索書を読み進めていこうと思う。

今年の冬がまた厳しければ厳しい分だけ、来年の春にはまた養分を蓄えて新たな姿となった自分がそこにいるだろう。そうした新たな自己に向けて、今日も一步の歩みを前に進めていく。フローニンゲン:2019/10/30(水) 13:21

#### 5109. ボルダリングの進展

時刻は午後の7時を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。今日の夕食も普段と全く同じものなのだが、今日はまた一段と美味しく感じられた。それは今日の午後から夕方にかけてボルダリングをしたからかもしれない。

今日のボルダリングもとても充実していた。前回は日本からフローニンゲンに戻ってきての初めてのボルダリングであり、尚且つ木曜日の午後は数多くの人で賑わっていたから、思う存分楽しめたかというそうではなかった。一方今日は、開店とほぼ同時にジムに到着してみると、壁を登っている人がまだ二、三人しかおらず—すでに二、三人いたという見方もできるが—、しばらくは壁を独り占めするかのように好きに登ることができた。

---

ところがしばらくすると、先日ジムのスタッフから話を聞いていたように、最近はこのジムの人気が高まり、ボルダリングを楽しむ人の数がどんどんと増えているためか、随分と人がやってきた。しかし先週の木曜日に比べるとまだマシであり、そこから自分のペースで壁を登ることができた。

今日はまず最初に、先日一発で登れなかった赤い課題(日本の階級グレードでいう5級)をウォーミングアップがてら登ってみた。すると、体がもうその課題の登り方を覚えていたためか、一発で課題をクリアした。その後すぐに、先週何度挑戦しても登れなかったパープルの課題(日本の階級グレードでいう4級)に挑戦してみた。1回目はやはり登れなかったのだが、先週末には到達しなかった地点まで到達することができた。その後、2回目は少しばかり冷静になり、今登った登り方を振り返り、幾分マインドフルネスな意識状態に整えてから再度挑戦してみると、なんと先週あれだけ手こずっていた課題がクリアできてしまったのである。

それはいとも簡単に登れてしまったという感じであり、ボルダリングは本当にボタンの掛け違えのようなところで登れるか登れないかが左右されるデリケートな特性を持っている点が改めて興味深く思えた。その課題をクリアした直後、私は嬉しくなり、クリアした課題を写真に収めた。

すると、60歳を超えているであろう男性がその課題のところにやってきて、壁を登り始めた。見ると、その男性の体の使い方はとてもナチュラルであり、素人のそれとは思えなかった。その方はなんなりと課題をクリアし、静かに壁から下りてきた。私はすぐに、「Goed!(お見事!)」と述べると、その方は笑顔を浮かべた。そこからはオランダ語ではなく、英語でお互いの自己紹介を簡単にし、ボルダリングについて話をした。

その方は、元々は自然の岩を登るロッククライミングをやっていて、今はそのためのトレーニングを兼ねてボルダリングを始めたとのことであった。その方曰く、ジムで行うボルダリングはよりテクニカルな要素が求められ、そうしたテクニカルな側面を磨くにはボルダリングは最適とのことであった。

しばらく会話をした後、次に挑戦していたパープルの課題の最初の一手がいまいちわからず、その方に初手を教えてもらった。実際のところは初手のみならず、そこからその方はその課題を登っていったのだが、途中でうまくいかず、落下してしまった。その課題はその方にとっても難しいようであった。その後、その方が「このパープルは難しいよね。実はその隣のホワイトの課題はパープルの



---

課題よりもグレードは高いけど、そのパープルよりも簡単だし面白いよ」と教えてくれた。私は未だかつてホワイトの課題(4級と3級の間)に取り組んだことがなく、それは私には難しいように思えた。しかしせっかくその方が勧めてくれたこともあり、挑戦してみた。すると案の定、前半部分でダメだった。

2度目、3度目と繰り返すうちに、少しずつ登れるようになってきたが、ゴールまではまだ少し遠かった。最後にもう一度その方に手本として登ってもらうのを見届けた後、そこからは私一人でその課題に引き続き挑戦することにした。どうやら私は、足をかけるホールドを一つ見落としていたようであり、それを使えばもしかしたら登りきることができるかもしれないと思った。そしてその次に挑戦した際には、そのホールドをしっかりと足で踏んでみたところ、そこからは意外とすんなりと登ることができ、なんとホワイトの課題もクリアしてしまった。

私は嬉しくなって、その課題についても写真に収めた。この勢いでその前に挑戦していた別のパープルの課題もクリアできるのではないかとあって何度か挑戦したが、それは難しいようだった。すると、今度は私よりも少し若めの男性が後ろからやってきて、その課題に挑戦し始めた。その彼もやはりうまくいかず、下りてきた時に私の方を見て、「これは難しいね」と笑顔で述べた。そこからはその男性とも少し言葉を交わし、何度か一緒に登ってみた。

その男性はさすがオランダ人であり、背が高く、リーチが長いので、私にはあまり真似できないような登り方でその課題をクリアした。確かに彼の登り方は私にはあまり真似できそうになかったが、彼が使ったホールドの踏み位置は私にとって盲点であり、足をその高さまで上げることができれば自分にも課題がクリアできるかもしれないと思った。

先ほどよりも数センチほど右足をホールドの高い位置に持ってきて、壁から引き剥がされないように踏ん張ってみたところ、通称「核心(その課題のキーとなる部分、あるいは山場)」と呼べるホールドを無事に掴むことができ、なんとその課題もクリアすることができてしまった。その時の喜びは今日一番であり、壁から下りてきて写真を撮影し、友人かつボルダリング仲間でもあるメルヴィンにWhatsApp経由で写真とメッセージを送った。そこからもジムにいる見知らぬ人たちと所々で会話を楽しみながら、日暮れまでボルダリングを楽しんだ。フローニンゲン:2019/10/30(水)19:24

---

## 5110. 継続の大切さを教えてくれるボルダリング

「継続は力なり」そのような言葉を改めて思う。それは作曲実践しかり、今日のボルダリングでも感じた。特に今日のボルダリングでは、達成感を感じる事が多く、本当に充実していた。もちろん今回のように、これまでクリアできなかった課題を次々とクリアできることはそれほどないだろうが、そうした日があった時にはその喜びに十分浸ることもあっていいだろう。

ボルダリングの進歩もまた、他の実戦と同様に、山あり谷ありであることはわかっている。山も谷もどちらの瞬間も楽しんでしまえばいいのである。山には山なりの楽しさがあり、谷には谷なりの楽しさがある。

今日の作曲実践に関していえば、もしかすると少しばかり谷のようであった。思うように曲が作れず、昨日は7曲ほど作ったのだが、結局今日は5曲作る程度に留まった。

言葉が自発的に生まれてくるのと同様に、音も自発的に生まれてくるものを形にしていくことが重要であり、それを無理に行ってはならない。どのような実践も、無理をすることなく、その自発的な発達運動に身を委ねる形で実践を継続していくことが大切だろう。

作曲について言えば、今日はフーガを1曲作ろうとしたのだが、まだフーガ形式の特徴とその作曲方法をほとんど掴めておらず、かなり難しく感じた。参考にしていていたフーガが少し複雑なものであったからなお一層難しく感じさせたのかもしれない。

日本で購入した作曲の理論書の中に、フーガの作り方も記載があったので、明日以降にゆっくりと当該箇所を読み進めていきたい。ちょうど昨日の朝に、美学関連の書籍、シュタイナー教育関連の書籍、そして森有正先生、辻邦生先生、ルドルフ・オットーの書籍などの初読を終え、昨夜からは作曲理論やボルダリング理論の書籍を読む時間が生まれた。

実際に今朝からは、作曲実践や日記の執筆に並行する形で、それらの理論書を読み進めていた。スポンジが水を吸収するかのように、それらの理論書を読み進めることができた。それはおそらく、これまで理論書よりもまず先に実践を積んできたからだと思われる。地道に積み重ねてきた実践経験が理論の大切さを感じ、理論書の内容を速やかに吸収していく運動をもたらしたのだと思う。理論

---

書を読解することもまた一つの運動である。読書は本当に運動なのだ。それは知的な運動のみならず、文字通り身体感覚を通じた運動でもある。それを実感させてくれる。

読書が捗る背景には、実践の積み重ねと合わせて、身体の調子を絶えず整えるように意識していることが挙げられるだろうし、また毎日適度な運動をしていることが挙げられるだろう。実際にボルダリングから帰ってきた今、知的運動を速やかに行うだけの身体が整っているように思える。とりわけボルダリングのように全身運動かつマインドフルネスの意識状態にさせてくれる身体運動は、思考を司る活動に肯定的な影響をもたらす。言葉や音が自分の内側から淀みなく生まれてくるかのような感覚がするのである。

これから寒さが厳しくなってくるが、ジムまでの片道5kmを軽くジョギングしていると寒さは気にならず、むしろ今日のように寒い方が走りやすいとさえ思った。また、ジムの開店時間である午後2時ごろから4時頃までボルダリングを楽しむのであれば、これから日が短くなっても真っ暗になる前に自宅に帰って来れそうである。

今日ジムで出会った60歳代ぐらいの男性が述べていたのは、ボルダリングの技術を向上させるには、理想は週に2回ほどジムに来ることだそうであり、私もそうしたいところだが、とにかく長く続けていきと考えているため、無理をせず、週に1回は必ずジムに通うようにしたい。それはこれから寒さが厳しくなり、日照時間がどれだけ短くなっても実現させたいことである。フローニンゲン:2019/10/30 (水) 19:40

#### 5111. 改めて実感するボルダリングの楽しさと奥深さ

やはりボルダリングは面白く、それでいて自分の身体のみならず、思考も精神も目覚めさせてくれる。ひょっとすると、それが身体や思考や精神を目覚めさせてくれるものであるならば、自分の霊性すらも育んでくれるような気がしている。

今日も試行錯誤を楽しみ、その瞬間に何かしらの縁で繋がった見知らぬ人たちと話をしながらボルダリングを楽しんだ。一人でジムに行っても十分にボルダリングを楽しめるというのは本当に有り難い。自分の心と存在をオープンにしていれば、様々な交流がジムの中で生まれ、そして学びがより深いものになっていく。確かに私は、基本的には一人でジムに通っているが、フローニンゲンのボ

---

ボルダリングジムのスタッフはみんな親切かつ気さくであり、ジムに通っている人たちもフレンドリーである。こうしたこともまた、私が一人でもボルダリングを続けていられる要因だろう。

もちろん普段は私一人でジムに通っているが、かかりつけの美容師かつボルダリング仲間であるメルヴィンとは、およそ月に1度髪を切ってもらう際に、お互いのボルダリングについて進捗状況を話し合っている。お互いがお互いにとってのメンターのような役割を果たしており、こうした友が身近にいることもまたボルダリングを継続できている大切な要因だろう。

今日はこれから、日本で購入したボルダリングの理論書『スポーツクライミング教本』を読み進めていく。これは今朝方の日記でも言及した通り、物理学や運動科学的な観点から洞察に溢れる解説が豊富な写真付きでなされており、書店でこの本を見つけた時、必読の書籍だと思った。

最近では純粋な科学者としての仕事はしていないが、元々は科学者としての仕事もしていた私にとって、この書籍に書かれているボルダリングに対するアプローチはとても共感する。今夜から明日以降しばらくは、本書を読み進めていき、再読と言わず、何度も繰り返し読み返したいと思う。ここまでのところ、すでにボルダリングジムに10回以上は通ったため、体験はある程度積んでいるため、理論的な事柄がより頭に入ってきやすい状態になっているだろう。まさに本書は今の状態になった自分にとって読み頃を迎えた書籍である。

先ほどから今にかけて、今日のボルダリング体験についてあれこれと書き留めてきた。その他に書き忘れていないかと考えている。その他に挙げるとするならば、やはり傾斜のある壁の登り方にまだまだ改善の余地があることを挙げたい。ロッククライミングを長らくやっているという60歳ぐらいの男性とその場でかなり打ち解けたので、その方に傾斜のある壁の登り方を教えてもらった。

その方の登り方には無駄がなく、全く力んでいない。傾斜のある壁でもうまく手を伸ばしながら、手を曲げてしまうことによるエネルギーロスを最小限にしている点が見事であった。また、ホールドのない箇所には足を擦り付ける技術(スメアリング)やホールドにフックをかけるかのように足をかける技術などが上手いと思った。それらの技術を一つ一つ習得していけば、エネルギーロスを抑え、今日取り組んでうまくいかなかった傾斜のあるその課題がこなせるようになってくるだろう。他の課題が新しく入れ替わっていても、この課題は以前から残ったままであり、どこかそれは「不朽の名作」のように

---

思えた。実際にその男性の方が、「これはいい課題だよ。傾斜のある課題をこなすために必要な基礎技術を満遍なく試すことを促してくれる」と述べていた。

時代を超えて聴き継がれる音楽作品のように、ボルダリングの課題にも名作の類があることが面白く思えた。今回挑戦した傾斜のある課題は、後一手のところまで壁から剥がされてしまったため、次回までに復習やイメージトレーニングをし、次回はなんとかクリアしたい。次回にジムに行くのは、ヴェネチア旅行に出かける2、3日前になるだろうか。

最後に、今日その他に学んだことと言えば、ちょっとした体の使い方やホールドの握り方、さらにはちょっとしたホールドの踏み方の違いにより、結果が全く変わってしまうということだった。この「ちょっとした」という点がおそらくボルダリングのコツであり、真髄なのだろう。そうした細かな点を疎かにせず、微細な事柄に意識を当てていくことを今後も意識して行こう。微細な事柄を意識し、微細な感覚を養っていくというのは、ボルダリングのみならず、作曲を含め、その他の実践において大切なことだということを改めて思う。

どのような知性領域・実践領域も、微細な事柄を認識し、それを実際の行動につなげていくことが発達の証であるという点が共通している。今日のボルダリング体験もまた学びの多いものであった。フーニンゲン:2019/10/30(水)20:01

## 5112. 空気の綺麗な場所での生活について

現在の時刻は午前7時半を迎え、気温はマイナス1度である。30分ぐらい前に太陽が昇り始め、今ほのかな光を地上に届けている。

つい先ほどゴミ捨てのために外に出てみたのだが、マイナス1度の世界はとても寒く感じられた。だが不思議と、それが嫌な寒さではなく、凜とした寒さとして知覚された。

気がつけば、10月も今日が最後だ。自分の誕生月が去り、また新しい月がやってくる。

今日はマイナス1度まで気温が下がるが、明日からはもう少し暖かくなるようだ。おそらくそれは、明日から1週間小雨が断続的に降ることと関係しているかもしれない。昨日と今日は特に快晴であっ

---

たが、明日からはあまり太陽の姿を拝むことができないかもしれない。ヴェネチアに旅行に出かける直前まで天気が悪そうだが、なんとか前日ぐらいは快晴であって欲しいと思う。

先ほどゴミ捨てのために外に出た時、早朝の朝の空気は新鮮で美味しく感じられた。ところが先日ふとインターネット上で目にしたフローニンゲンに関するニュースによると、オランダは国全体として空気がそれほど綺麗ではなく、フローニンゲンもその例外ではないそうだ。正直なところ、これまで世界の様々な場所に住んだり旅行に出かけたりした経験をもとにすると、オランダの空気は綺麗な方である。しかしそのニュースで取り上げられていた測定結果をもとにすると、それほど綺麗ではないことがわかり、だとすると、その他の国々空気は相当に汚染されていると思われた。

もちろん、その測定はオランダの大都市のしかもゴミゴミとした場所でなされたものだと思われるため、オランダの全ての場所の空気が一様に綺麗ではないと言えるわけではないと思う。そのニュースの記事では、「高速道路の周りやゴミゴミとした街の中心部を避け、公園の近くの家に住みましょう」とあまり現実的ではない解決策を提示していたが、確かに道路や人が密集する場所を避け、自然がある公園のような場所の近くであれば空気はそれほど汚染されていないのだろう。

いずれにせよ、このニュースを見て、以前から考えていたように、できるだけ空気が澄んだ場所で生活を営みたいという思いが現れてきた。そのニュースが伝えているほどにはフローニンゲンの空気は汚染されているとは思えないのだが、確かにより空気が美味しい場所がこの世界にはあるはずである。

オランダとは別にもう一つ生活拠点を設けようかと考えているフィンランドなどの北欧諸国は、特に自然の近くであれば相当に空気が澄んでいるのではないかという印象がある。ノルウェーのベルゲンの岬の上にあるグリーグの元邸宅兼博物館を訪れた際、そしてフィンランドのアイノラの森の中にあるシベリウスの元邸宅兼博物館を訪れた際にそれを感じた。

今から5年前に東京に1年間ほど住んでいた時に、知人の方々と一緒に長野に小旅行に出かけた。そこは知人のうちの一人の方の地元であり、とてもローカルな駅に降り立った瞬間、東京とは比べ物にならないほどの空気の美味さに仰天したのを覚えている。

---

現在106歳を迎えておられる美術家の篠田桃紅さんは、健康で長い生きをする秘訣として、自分の好きなことに従事して、ストレスを溜めずに自由に生きることと、空気の綺麗な場所で生活することを挙げておられたように思う。篠田さんは、普段は東京で生活を営まれているようだが、空気の澄んだ富士山の麓の近くにアトリエ兼別荘があり、そこで過ごすことも多いようだ。空気の綺麗さという観点で世界を意識的に見てみようと思うのと共に、この点についても食と同様に、何か美化に向けた試みや実践ができないかと考える。フローニンゲン:2019/10/31(木)08:03

### 5113. 「先生」と呼べる人物を持つことの有り難さと大切さ:人間関係のフラットランド化に抗って

時刻は午前8時を迎え、辺りには優しい朝日が降り注いでいる。外気はすこぶる冷たく、今の気温はまだマイナス1度だが、それでも人々は各々の活動場所に向けて通勤通学をしている。通りに止まっている車の上には白い霜が降りており、昨晚からの冷え込み具合を静かに物語っている。

先ほど、空気の澄んだ場所で生活をするということに関して、美術家の篠田桃紅さんの話を出したと思う。実は先日日本に一時帰国した主たる目的というのは、篠田さんの作品が収められた岐阜県の美術館に行くことと、画家の小松美羽さんの作品が収められた群馬県の美術館に行くことであった。

先日までの一時帰国では、篠田さんの作品を直に見る幸運に恵まれただけでなく、美術館で画集を購入したり、4~5冊ほど篠田さんのエッセイ集を購入することができ、そのうちの1冊はオランダに持って帰ることにした。それぐらい篠田さんは私に影響を与えてくれているのだが、篠田さんに関して実は前々から違和感があった。実は今もその違和感を感じながらこの文章を書いている。

確か、以前の日記のどこかの中では、篠田さんのことを「篠田先生」と表現していたように思う。私は篠田さんに直接お会いさせていただいたこともなく、全く面識はないのだが、実のところ、篠田さんのことを「篠田さん」と呼ぶことに相当強い抵抗感があった。そしてそれは今この瞬間もある。やはり私にとって篠田さんは、先生と呼ぶにふさわしい師のような方なのだと思う。一度もお会いしたことはないのだが、勝手ながらそのようなことを思う。そうしたことから、今後は篠田先生と表記するにしたい。

---

篠田先生と同様に、面識が全くない方で先生と呼んでいるのは、森有正先生、辻邦生先生、井筒俊彦先生ぐらいだろうか。私がそうした先生方の存在を知った時には、皆すでにお亡くなりになられていた。一度も会ったことがない故人に対して「先生」と呼んでいる自分の姿を見るにつけ、彼らがどれほど自分にとって大切な存在であり、どれほど大きな影響を与えてくれたかを思う。

「先生」と呼べる人物を持てることの有り難さ。フラットな人間関係を良しとしようとするこの現代社会にあって、私は改めて、フラットではない、垂直的な人間関係の価値に光を当てている。

この現代社会は、人間関係までもフラットランド化させようとしているのではないだろうか。確かに平等を重じて活動や生活を営んでいくことは大切だが、平等を重んじるばかりに、本来そこにあるはずの質的な差異を蔑ろにしていないだろうか。

私は、人間関係にも質的な差異があると考えている。ある人とまた別の人と付き合う際には、そこにはやはり人間関係の水平的な種類の違いだけではなく、垂直的な違いというものが内包されているように思う。ここで言っている垂直的な人間関係とは、日本で未だに根強く残っているような歪な年功序列型の人間関係ではなく、相手を抑圧する形で働くものとは全く違う次元のものである。むしろそれは、健全な発達を私たちにもたらすものだ。

「この方の前では妙に緊張してしまう」あるいは「この方の前では背筋を正される」といったような表現で代表される師匠のような存在がどれほど身近にいるだろうか。それは何も実際に生きている方だけを指すのではなく、上述のように、私の場合であれば幾人かの先人たちが該当する。

自分を緊張させてくれる人、自分の背筋を正してくれる人というのは、真の意味で自己を育てくれる人なのではないかと思う。それは成熟に必要な「発達の緊張」をもたらす人と言い換えることができるし、「発達の背筋」を伸ばしてくれる人だと言い換えることもできるだろう。いずれにせよ、そうした垂直的な人間関係を蔑ろにし、全ての人間関係をフラットにして行こうとする社会的な流れは、人が成熟するための歩みを止めてしまうのではないかと思われる。

水平的な、つまり対等な人間関係というのは聞こえがいい。そして確かにそうした関係性が多い場合推奨されるのは理解できるが、垂直的な関係を持たせてくれる人たちがどれだけ周りにいるのかは、人間関係のフラットランド化が進行し、人間関係がますます希薄になる社会にあって、自己を



---

育む上でとても大切なことのように思える。そしてそれは単に自己を育むだけではなく、私たちの社会を育む上で大切なことのように思えるのは私だけだろうか。フローニンゲン:2019/10/31(木)  
08:39

#### 5114. 不幸が続くフローニンゲン: 生と死の存在と非在について

昨日ボルダリングと10kmほどのジョギングを楽しんだからか、昨夜は熟睡ができた。熟睡のしすぎで今朝目覚めた時には、すでに辺りが明るくなろうとしていて、なんと時計は6:56を指していた！昨日は午前3時過ぎに目覚めたことを考えると、今朝の起床はあまりにも遅すぎた。だが、それもまた自然の流れだと受け取っている。

もう十数年も目覚ましなど使ったことがなく、特に欧米で暮らし始めてからは、起きたい時間に起きるということが習慣になっている。心と体が欲するまで睡眠を取るという、本当に自然な睡眠だ。決して人工的にこちらから睡眠時間に手を加えることをせず、心と体が求める適量の睡眠を取ることが長年の習慣になっている。

これは昨夜日記に書き留めるか迷ったのだが、実は昨日もまた悲劇的な出来事がフローニンゲンの街であった。ちょうどボルダリングジムから帰ってくる最中には、ノーダープラントソン公園という憩いの場所があり、そこを通り抜けて自宅に帰ろうとしていた。すると、その公園と目と鼻の先の道路で一台の大きなバスが止まっており、その周りには多くの人が集まっていた。そのバスは、FCフローニンゲンのロゴが貼られ、チームカラーの緑に塗られたバスであり、市内を走っている姿をよく見かける。

停車したバスに群がる人たちの姿を見て、「何かあったのだろうか？」と私は思った。その時はジムからの帰りであり、軽くジョギングをしており、バスの近くまでやってくると、誰かがバスの下で倒れている姿を目撃した。それはどうやら若い女性のようにあり、頭はバスの下にあり、足だけがこちら側に見えてきた。その女性の横には救護隊が駆けつけ、何か応急処置をこれから施そうとしているようだった。

---

後から知ったが、ちょうど私がその場所に居合わせたのは、その事故が起こって数分後のことだったようだ。その時私はサングラスをしていたのではっきりとは見えなかったが、バスの下で倒れている女性は身動きをしておらず、地面にただ横たわっていた。そして、黒い血のようなものが流れているように見えたのである。そのような事故が昨日にあった。平穏なフローニンゲンの街に、このところ悲劇が続いている。少しばかり不穏な感じがする。

先日の殺人事件ばかり、昨日の事故ばかり、私たちはいつどのような形でこの世を去るか分からず、そして人間とはかくも脆く儂い存在なのだということを改めて思った。

私たちは普段、もしかしたら、自宅に入り込んだ小さな虫を何気なく殺してしまうことがあるかもしれないが、この社会には、それと全く同じ感覚で人を殺す人間たちがいるのである。そして私たちは、そうした虫たちと同じくらいに脆く、いともたやすく死んでしまう生き物だということを改めて思う。

以前にも言及したように、私たち一人一人の存在は、本当に神であり仏であり、同時に一匹の虫けらなのだ。そうした相矛盾した特性を内包しているのが私たち人間存在なのだ。いやひよっとすると、神や仏と虫けらはそもそも相矛盾などしていないのかもしれない。またそもそも、生や死という現象そのものの存在もあやふやなように感じられてくる。生も死も、現象を超えたものとしてそこにあると述べたほうがいいのか、それともそれらは最初からないものとして捉えたらいいのか。生も死も存在かつ非存在のものなのだろうか。フローニンゲン:2019/10/31(木)09:03

#### 5115. 今朝方の夢

ハエのように両手をこすりながら自転車を運転する若い男性の姿が見える。その後ろを、暖かい手袋をはめた小さな男の子が自転車で走っている。前者の男性には手袋を貸してあげたい気分になるし、後者の男の子とは未来について一緒に話したい気分だ。

時刻は午前9時を迎えた。いつもであれば、この時間になるまでにすでに数曲ほど曲を作っているが、今日はまだ一曲も作っていない。昨日はボルダリングの調子がとても良かったのに対して、作曲の方の調子はそれほどでもなかった。端的には、創造活動に取り組むための集中力と、凝縮されたエネルギーが少しばかり不足しているようだった。そんな日から一夜が明けた今日は、作曲に

---

関してはすこぶる集中できるような感覚がある。とはいえまだ何一つ曲を作っていないのだが、そのような予感があることは喜ばしい。

こうした状態を生んでいるのは、昨日ボルダリングを通じて全身運動をしたことと、10kmほどの軽いジョギングをしたことのおかげだろう。足腰を使い、全身を活用すること。そして脳に新鮮な酸素を送る運動は、本当に自分の集中力と創造活動に向かわせるエネルギーを高めてくれる。そのようなことを実感する。

それでは早朝の作曲実践に取り掛かる前に、今朝方の夢について簡単に振り返っておきたい。夢の中で私は、父が運転する車の後部座席に座っていた。車の中にはその他にも私の友人が乗り込んでいて、お互いの食生活について話をしていた。夢の中の父も現実世界と同様に、食事に気を遣い始めているようであった。何やら先日は断食をしてデトックスをしたらしく、今朝はまだ何も食べ物を口にしていないようだった。

ちょうど時刻は昼時を迎えようとしており、これからみんなで何か食べに行こうかという話になった。そこで父はラーメンを食べたいということを述べ、私はそれを聞いた時、それは馬鹿だと明確に述べた。せっかく食事に気を遣い、数日前に断食をしたばかりなのに、そこでラーメンを食べるのは、せっかく綺麗にした胃腸に泥を塗るようなものだと思われたのである。だから私は、父に対して、それは馬鹿だと明確に伝えたのである。

実の息子から馬鹿だと言われた父は怒る様子もなく、親に怒られた子供のように小さくなっているように思われた。仮に父が反論をしてきたら、食生活を整えている最中に、その辺の店でラーメンを食べることがどれだけ馬鹿な行為なのかについて延々と説明するつもりでいた。

しばらくすると、車が停車し、私たちは車から降りた。すると、父を含め、友人たちの姿がフッと消えた。その代わりに、私の目の前には、小中高時代の女性友達(MH)がいて、何やら喜んだ表情を浮かべていた。どうやら、ビンゴ大会で景品をもらったようだった。どういうわけか、私はそのビンゴ大会の運営者の一人であり、彼女はもらった景品を少し預かっておいて欲しいと私に述べた。

どうやらこれから街に観光に出掛けたいとのことであった。私は彼女の申し出を快諾した。すると、もう二、三人、私に景品を預かっておいて欲しいという人が現れた。彼らはいずれも私の友人だった。

---

---

私は預かった景品をどこに置いておこうかと考えた。ちょうど目の前に学校らしき建物があつたので、学校の教室の机の上に置いておこうと思った。ただし、それらは貴重な景品であつたから、誰かに盗まれたりしないようにする必要があると思っていた。

その教室の横から何か人の声がしたので教室を覗いてみると、そこには高齢の女性が一人と小さな男の子がいた。男の子の方をよく見ると、彼は今サッカー日本代表で注目を集めている若手選手(TK)だった。現実世界における記憶と夢の中の光景が錯綜し、現実世界においてスペインにやって来た彼のことを私は応援しているのだが、そんな彼が今日の前では幼児の姿であることが不思議に思えた。

どうやら彼はまだ言葉を覚えてたのようであり、しかも生まれてからすぐに日本を離れているようだったので、日本語はおぼつかないようだった。そんな彼が突然愛らしい笑顔を浮かべ、「マタオコシクダサイマセ〜(またお越しくださいませ〜)」という日本語を喋った時には、思わず笑ってしまった。どうやら両親と一緒に日本食レストランかどこかに行き、そこでそのような日本語を耳にしていたのだろう。そこから私は彼の方に近づいて行き、彼と少しばかり遊んだ。彼が大事にしている物にこちらが指を近づけ、彼がそれを見事に防ぐというようなゲームだった。まだ言葉はあまり話せないような年齢だったが、彼には優れた運動能力が備わっていることが、そのゲームをしているとぐにわかった。とにかく反射神経が優れていると思ったのである。

そのようなゲームをして彼と戯れていると、近くにいた高齢の女性がゆっくりと笑顔で歩み寄って来た。その方に挨拶をすると、その方のお年は94歳とのことであり、今もまだ現役の英語教師として学校で教えているとのことだった。「まだまだ楽しく子供たちと英語を学んでいますよ」とその方は満面の笑みで述べていたことが印象に残っている。

次の夢の場面では、私は高校の文化祭の出し物の準備に向けてあれこれと動き回っていた。そのように書くと仕事を熱心に行っていたように受け取られるかもしれないが、実際のところは、私は出し物のまとめ役を務めており、自分が手を動かすことはほとんどなかった。小中学校時代の友人二人(HY & KS)がボルダリングの出し物に向けて、課題のデザインをすることになっていた。彼らの役割は、壁に色を塗るようなデザインではなく、文字通り、どのようなルートを設定するのかという課題設定だった。私は彼らがどのような課題を設定するのかに関心があり、その進捗を尋ねてみた。する

---

と、まだ何も決まっていないとのことであり、これから真剣に課題の設定を考えていくとのことであった。それを聞いた時、どこからともなく盛大な花火が上がった。辺りはもう暗くなっており、盛大に打ち上げられた花火はとても綺麗だった。

花火が打ち上げられると、遠くの方で、小中学校時代から付き合いのある親友(YU)がはしゃぎ始め、その声が聞こえて来た。彼がはしゃぐのも無理はないと思いながら、私はそこからしばらく、星々のように輝く美しい花火をぼんやりと眺めていた。フローニンゲン:2019/10/31(木)09:42

#### 5116. 飛行機を用いた長旅に関する実験

午前中、静かな環境の中で、小鳥のさえずりを聴きながら作曲をしていた。だが今日は音を生み出すよりも、言葉を生み出したい日なのかもしれない。

ちょっと作曲の手を緩めて、文章をしたためることにしたい。そんなことを思わせてくれる穏やかな午後の光が街に降り注いでいる。

午前中に曲を作っていると、私は自分の心を穏やかに宥めるために曲を作っているのかもしれないと思った。あるいは、さらに深く心の静けさや激しさを味わうために曲を作っているのかもしれないと思ったのである。曲を作っていると、曲を生み出すという行為そのものと音の中に浄化作用があるかのように、治癒的な効能を感じる。そして、曲はその時の自分の内面世界を克明に描き出す。それは言葉よりも正確で確かな実感を持っているものだと言えるかもしれない。

今日もこれから午後の作曲実践に取りかかっていく。夕方頃まで作曲を行い、そこで一度作曲の手を止めて、そこからは近所の運河沿いにジョギングを兼ねて出掛けて行き、その足でスーパーに立ち寄る。スーパーでは、ジャガイモ、サツマイモ、トマト、ニンニク、そしてサランラップを購入したいと思う。

今午後の穏やかな光が書斎に差し込んでおり、それは食卓にも差し込んでいる。日本からオランダに戻って来てからは、私は毎日シイタケを食べており、午後から数時間ほど日光に当てて天日干しをしている。それによって、ビタミンDが何倍にもなるからである。

---

昼時にふと、来年日本に一時帰国する時には、これまでよりもゆとりのある旅をしようと思った。以前の日記にも書き留めているように、日本に帰る際には諸々の理由からJALを活用している。CAの方から話を伺ったところによると、一昔前であれば、日本からアムステルダムまで一本のフライトがあったそうなのだが、今はもうそうしたフライトはなく、必ずどこかの国で乗り継ぎをする必要がある。前々から気づいていたのだが、特に日本へ帰る際の身体的な負担は見過ごすことができない。飛行機での長距離移動は、気をつけないと寿命が縮まる気がする。

飛行機での長旅は、見えないところで身体的にも精神的にも疲労を蓄積させてしまう。仮にビジネスクラスに乗っていても、乗り継ぎがあると疲れてしまうものである。そうしたことから、来年はフィンランドで数日間前泊した上で日本に帰り、オランダに戻ってくる際にはヘルシンキの空港近くのホテルに宿泊し、翌日にオランダに戻ってこようと思う。行きに関していえば、以前訪れたフィンランドのアイノラの地は、緑豊かで湖などもあり、そこで2泊ほどした後に日本に戻ることが良いかと思う。アイノラの地にはシベリウスが住んでいた元邸宅があり、また足を運んでみたい。

先ほど改めてアイノラ近郊を調べてみると、良さそうなホテルを見つけ、その近くに小さな美術館があることに気づいた。そこに所蔵されている絵画作品を写真で眺めてみると、是非とも実際に足を運んで現物を見たいと思った。計画としては、来年はヘルシンキと日本のどこかの空港を行き来するフライトを予約し、アムステルダムからヘルシンキまでのフライトは別途予約しようと思う。行きに関しては、アムステルダムからアイノラまで行き、そこで2泊してから日本に向かう。

アイノラからヘルシンキの国際空港までは電車で近くの距離にあるため、大抵ヘルシンキを出発するフライトは夕方ものに乗っているため、昼前にホテルを出発すれば、ヘルシンキのラウンジでくつろげるだろう。いつもヘルシンキのラウンジではあまりくつろぐ時間がないことは残念であった。というのも、ヘルシンキの空港のラウンジは、他の国のラウンジに比べて落ち着きがあるように感じられ、中にはサウナのあるラウンジもあるほどにゆったりと過ごせる空間となっているからだ。

気は早いですが、来年日本に一時帰国する際には、アムステルダムを昼過ぎ頃に出発し、アイノラのホテルに夕方か遅くとも午後6時頃に到着するようにする。翌日は近所の観光に当て、その翌日に日本に戻るようにする。来年はもう成田空港を使うのではなく、別の空港を使おうかと考えている。来年は東京に立ち寄る予定はなさそうであり、であればわざわざ成田空港を使う必要もない。

---

来年は、父方の加藤家にゆかりのある石川県と、母方の加藤家にゆかりのある福井県に足を運びたいと考えているため、関空を活用しようかと思っている。これまで成田空港を使って日本を出発する際には、常に近くの日航ホテル成田に前泊をしていた。仮に今回関空を使うのであれば、日本に戻ったその日と、日本から出発する前日は、関空内の日航ホテルか、関空から程近い場所にある温泉付きかつロボットが働いている近未来的な面白そうなホテル(その名は「変なホテル:開店は2019年11月1日」)に宿泊しようかと考えている。飛行機での長旅の疲れをすぐに癒したいという考えから、日本に戻った際には空港近くのホテルに一泊しよう。それぐらいに移動の疲れには気をつけたいと思う。

高齢になってくれば、目には見えない疲労が身体の中で何かボタンを掛け違えさせ、それによって死に至ることは十分に考えられるし、実際にそのような形でこの世を去っている人が身近にいる。私たちの身体の細胞は複雑なネットワーク構造を成しており、ネットワークには自然回復力を持つネットワークの堅牢性がある一方で、ちょっとしたことでネットワークが全て破壊されてしまうというネットワークの脆弱性もある。

飛行機での長旅は、ネットワーク脆弱性を誘発し、身体の構造を破壊してしまうことすらある。そうしたことを考えると、ただでさえ飛行機というのは長距離を高速に移動させてしまう手段なのだから、それを使う前後はできるだけゆったりと過ごすようにし、フライトの疲れを極小化させるように努めた

い。

日本からオランダに戻る際にも、空港の近くで前泊し、仮にフィンランドを経由してオランダに戻るのであれば、帰りに関してはアイノラではなく、ヘルシンキ空港の近くのホテルに宿泊し、その次の日の昼あたりの便でアムステルダムに戻ってこようと思う。いつもアムステルダムに戻ってからフローニンゲンまでの2時間半の列車移動がかなり疲れるため、それを考えるとヘルシンキで前泊するのが賢明のようだ。

飛行機を用いた長旅をする際には、こうした形で身体のケアをするようにしておけば、高齢になってもなんとか飛行機を使った旅に出かけていけるかもしれないという光が見えて来た。来年からは実験がてらそうした旅をしてみようと思う。フローニンゲン:2019/10/31(木)14:36

---

## 5117. 楽しみで始まり、楽しみで進行し、楽しみで終わる日々

時刻は午後7時を迎えようとしている。辺りは真っ暗闇に包まれ、一日が終わりに向かっていることを実感している。

夕方に近所のスーパーに買い物に出かけ、自宅に戻って書斎の机に着くと、夕方の澄み渡った空に美しく輝く幾筋かの飛行機雲が見えた。それはまるで絵筆のようであり、薄赤紫色に輝く飛行機雲の絵筆の跡が、夕方の空に輝いていた。

日記を書くことから一日が始まり、そして曲を作り、また日記を書いて曲を作る。そのようにして一日の時間が静かに流れていく。そして、毎月世界のどこかに旅に出かける形で人生が緩やかに進行し、深耕していく。

自分の内側にある言葉と音に向き合う形で、この人生が緩やかに前に進んでいく。今日もまたそうした一日であった。

夕方に作曲をしている時にふと、西洋音楽の音感に慣らされた自分の聴覚をより一層開拓していこうと思った。端的には、西洋音楽に慣らされた感性を冷静に吟味し、西洋音楽固有の音感によって閉ざされてしまった自らの音感を開いていこうと考えていたのである。ここからは、自分の耳に心地良いと思える感覚の幅を広げていこうと思う。また、無意識に音を予想するその感覚の領域を拡張させていく。それらを意識しながら日々の作曲実践に取り組んでいこう。このあたりの話については、シュタイナーの思想をもとにして書かれた“Expanding Tonal Awareness: A Musical Exploration of the Evolution of Consciousness (2014)”が参考になるであろうから、それを近々再読しよう。

今日はこれから就寝までの時間を使って、コード理論に関する書籍を読み進め、初読が無事に終われば、リハーモナイゼーションに関する理論書か転調に関する理論書を読んでいく。明日もそれらの書籍を読み進めていこうと思う。そして就寝前にはいつものように、画集を眺める。日本からオランダに戻って以降は、午後9時以降はパソコンを閉じ、画集を眺めることが習慣になっている。これはとても良い習慣だ。



---

新しいMacを購入してみると、それは以前よりも目に優しい光を発するような作りになっていた。さらに私は、ブルーライトをより削減するシートを画面にかけることによって、睡眠の質を下げるような光を極力浴びないように心掛けるようになった。画集を眺めることに加えてこうした工夫によって、入眠が以前よりもさらに速やかになり、質の高い睡眠がもたらされ、以前よりも朝早く起きることが自然となされているように思う。

今日は誰の画集を眺めながら就寝までの時間を過ごそうか。その時の気分に合わせて画家の画集を選ぶ楽しみと、実際に画集を眺める楽しみの双方が、一日の最後に待っている。毎日は日記を書くという楽しみで始まり、日記と曲を書くという楽しみで進行し、画集や楽譜を眺めるという楽しみで締め括られていく。こうした日々を淡々と過ごしていこう。フローニンゲン:2019/10/31(木)19:11

### 5118. 今朝方の夢

目覚めて窓を開けてみると、冷たい風が部屋の中に流れ込んできた。どうやら外の気温は0度らしい。昨日はマイナスの気温まで下がっており、今日もまた外気は冷たい。そんな寒さの中、寝室の窓を開けた時には、遠くの空が赤紫に輝き始めていた。

今朝も起床時間は遅く、6時半をとっくに過ぎていたのだが、そのおかげか、窓を開けた時に美しい朝焼けを眺めることができた。

今、少しずつ空が明るくなり始めている。ダークブルーの空を眺めながら、今朝方の夢について振り返りたい。夢の中で私は、小中高時代の友人二人(HY & NK)と一緒に屋外でコピー機を直していた。そのコピー機は片方の友人(HY)のものであり、どうやら故障してしまっただけで、それを三人で一緒に直していた。とはいえ、私にはコピー機の構造に関する知識がなく、単に傍で眺めたり、ちょっと手でコピー機を支えたりするぐらいしか手伝うことができなかった。二人が着々と修理を進めていき、インクのカートリッジを入れ替え、途中でどういうわけかコインがコピー機を通るのかを友人が実験し始めた。

挿入したコインはどうやら100円玉のようであり、100円玉をコピー機に通すと、それは下に落ちて来た。友人曰く、どうやら実験は失敗したようだった。本来であれば、通した100円玉がコピー機の中を

---

ぐるぐると回るようになるはずとのことだった。私は落ちた100円玉を拾い上げ、それを改めてまじまじと見ると、それは黄金色に輝いていた。その輝きに幾分うっとりしていると、見知らぬ男性が私たちに忠告をして来た。その男性曰く、どうやら私たちは誰かに狙われているそうである。いや、その男性も確かではないらしく、私たちが狙われているのか、私たちは誰かを狙ってその人物を追いかけているかのどちらかだと述べた。

私は少し困惑しながら、友人の二人をその場に残し、辺りを見て回ることにした。すると、何人かの男性が一人の男性を追跡している姿が目に入った。「このことか」と私は思った。私は追跡をしている男性たちの方に走って近づいていき、事情を聞いた。どうやら逃亡犯を捕まえようとしている最中とのことであり、私もその追跡に加わった。

すると突然、目の前に崖のある山道が現れ、逃亡中の男は高価なスポーツカーに乗り、坂道を上ったり下ったりしながらなんとか逃走しようとしていた。追いかけている方の私たちは数人に分かれ、私たちも車に乗った。なぜだか、私たちの車もことごとく高級車であり、かなりのスピードが出せる車だった。逃亡中の男は、なんとか私たちを振り切ろうとし、私たちが待機する方に向かって来て、車ごと体当たりする形で強引に突破しようとした。見事にそれをされてしまい、男性が運転するスポーツカーは山の上の方にすぐさま消えてしまった。そこで私は車から降りた。

右の谷側を眺めると、そこに大きな湖があった。湖の全貌がより眺められる場所に少しばかり歩いていくと、湖に巨大な鍋が浮かんでいた。鍋の底の方を見ると、大きな蜘蛛が動き回っており、一匹の蝶を襲おうとしていた。それは蝶のように見えたが、もしかしたら蛾だったかもしれない。

いずれにせよ、しばらくその様子を眺めていると、蜘蛛は蝶を仕留めて、それを食べ始めた。すると私の左隣に、協働者の知人が現れ、彼は蜘蛛を退治すると述べた。どのように退治するのか聞いてみると、鍋の上から泥を流し込み、蜘蛛を窒息死させるとのことであった。その方は得意顔を浮かべて、「これが蜘蛛を殺すには一番いい方法なんですよ」と述べた。果たしてそれがうまくいくのか私は不思議に思ったが、実際にその方が鍋の上から大量の泥を流し込んでいくと、蜘蛛は呼吸ができず動くことをやめた。その光景はちょっと残酷であり、少し気持ち悪いものでもあったから、私はその場を離れ、湖を眺めながらまた山道を歩き始めた。フローニンゲン:2019/11/1(金)07:29

気がつけば今日から11月を迎えた。そして今日は金曜日とのことである。曜日の感覚はほぼほぼ消失しており、日々は自分のなすべきことに取り組むことによって静かに進行していく。

フローニンゲンは秋を足早に通り越して、すっかり冬のようなようである。就寝中の湯たんぽは必須のものとなり、日中に一番気温が上がる時間帯を除いては暖房をつけたままにしている。もちろん、これからまだまだ寒くなってくることを考え、暖房の温度はそれほど高くしないようにしている。

ちょうど今、小鳥たちが美しい鳴き声を上げていて、彼らが奏でる音楽に耳を傾けている。裸になった街路樹に止まっているのではなく、どうやら彼らは一階の庭にあるまだ緑が残った木々に止まっているようだ。今日もまた、ゆっくりとだが着実に自分の取り組みを前に進めていこう。日記を書き、そして作曲をしていくこと。それと並行して緩やかに読書をしていこう。

昨夜、クリムトとシーレを取り上げた絵画雑誌を眺めており、シーレの生き方と芸術への向き合い方に大変共感するものがあり、しばらくシーレに関する解説文を食い入るように読んでいた。全てを読み切ることができなかつたので、今夜もまた解説文の続きを読み進めていきたいと思う。

先ほど少しばかり今朝方の夢を振り返っていた。今朝方はまだその他にも夢を見ていた。夢の中で私は、自分の目の前に現れた巨大な世界地図を眺めていた。それはデータ化されたヴァーチャルな地図なのだが、3Dのように臨場感のある地図だった。すぐに気づいたが、どうやらそこで描かれている世界の地形は、今から数百年、あるいは数千年先の姿を表しているようだった。いくつかの大陸が繋がり始めており、現代を生きる私にとってみれば、それは違和感のある世界の形だった。

まずはオランダの位置を探し出し、オランダを特定すると、オランダから東側に少しばかり行ったところに、なんと日本があった。みると、オランダから仙台まではとても近い距離にあるらしく、飛行機でわずか数時間で到着できるかのように思えた。そして、仙台の北に少しばかり行ったところにフィンランドがあった。私はそのような不思議な地図をぼんやりと眺めていた。

すると突然、私が立っている脇にあるトイレから大きな音が聞こえて来た。誰かが身体からの大きな便りを得ている、つまり大便をしているのだと思った。その音はかなり激しく大きなものだった。水を

---

流さずに大便をしているのだから、きっとその人はきちんと自分の大便を観察し、身体の様子を確認しているのだろうと想像した。するとトイレから出て来たのは、一人の若い女性であり、私はそれに驚いた。水を流しながらではなく、大便を出す音があまりにも大きかったため、私ははっきり男性かと思っていたのである。そうした思い込みが打ち破られる形となった。

その女性の顔は見え、彼女はトイレの横にある建物の中にスッと消えていった。どうやらそこは銭湯のようであり、朝風呂にでも入るのだろうかと思った。私は直感的に、その女性はトイレを中心にしてその左隣にある銭湯と、トイレの右にある食堂の三つを行き来して生活しているのだと思った。より厳密には、彼女の朝のルーティンはトイレに行き、そこで大便を出した後に銭湯に行き、その後食堂で働き始めることなのだということが直感的に分かったのである。それが分かったところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は体育館のような場所であるゲームに参加していた。体育館のフロアには椅子がいくつか円形に置かれており、そこに何人かの人が座っていた。最初私は、彼らは外国人だと思っていたのだが、話しかけてみると全員日本人であることが分かった。私たちは、そこから言葉ゲームを始めた。

ファシリテーター役の人が一枚のカードを引き、そこに書かれている四文字熟語を元に、三つの観点から簡単なストーリーを作るというゲームだった。私は隣に座っている人との話に盛り上がり、前の人たちがどのようにストーリーを作っているのかを確認しないままだった。

私の番が近づいて来た時に、どのようにストーリーを作っていけばいいのかのコツを掴むために、前の人たちがどのように話を展開しているのかに注目をした。すると、思っていたよりもそれは簡単だとわかり、私はそれを即興的にやろうと考えた。ただし一つだけ、「それは絶えず矛盾を内包する」というセリフだけは物語のどこかで挿入しようと思っていた。いざ私の番が回ってこようとした時に、突然体育館が姿を変え、大きなコンサートホールになった。

ゲームを一緒に楽しんでいた私たちはステージ上において、眩しいばかりのスポットライトを浴びている。観客席の方を見ると、客席はもう満員であった。「こんな大勢の前で今から物語を発表するか」と私は一瞬たじろぎそうになったが、大勢の前で自分の物語を即興的に発表するのは面白そう

---

だと思い、発表に向けた準備をした。軽く咳払いをし、声が出せる準備が整ったところでいざ物語を発表し始めようと思ったその瞬間、ステージ上に座っていた私たちの体が宙に浮かび、白いロープで繋がれたブランコに全員が座らされていた。

そしてブランコがゆっくりと揺れ始めた時、それは単に揺れているのではなく、揺れながらにしてどこかに向かって進んでいるのだと思った。ステージの前方から後方に向かってブランコが進もうとしている時、私はすぐにその異変に気付いた。「このまま進めば全員地面に落ちてしまう」と思った瞬間に、多くの人々が地面に叩き落とされ、私はそれを事前に予測していたからか、確かに私も地面に落ちてしまったのだが、白いロープを使ってなんとか踏ん張っていたため、その衝撃は少なくすんだ。一応全員無事であり、怪我もなく、ブランコが地面に落ちたのは誰の仕業なのかについて私たちは少しばかり話し合っていた。フローニンゲン:2019/11/1(金)08:08

#### 5120. 書道への関心: デッサン的な作曲実践

時刻は午前6時を迎えようとしている。今、書斎の窓を開け、換気をしている。開かれた窓から、雨の滴る音と小鳥たちの清澄な鳴き声が聞こえてくる。

今日は昼前まで雨のようだが、午後からは雨が止むとのことである。午後から街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に出かけようと思っていたのでそれは助かる。

先日言及していたように、オランダ人の友人を含め、外国人の友人に何か手紙やポストカードでメッセージを送る際に使おうと思っていた筆ペンを近々購入しよう。来週末にヴェネチアに行く前に、平日のどこかにもう一度このスーパーに立ち寄ることがあるだろうから、その際に街の中心部にあるアートショップに立ち寄ろうと思う。

一切公開していないが、作曲実践をして曲を生み出した際には、私は手元の作曲ノートに水筆色鉛筆で絵を描き、水筆ペンを使って滲み絵を描いている。このように絵を描くことも細々と毎日行っていると、言葉を通じた日記や音を通じた作曲とはまた違った形で、その瞬間の自分の内面を描き出しているかのようで面白い。

---

ここ最近では、書道にも関心を持ち始めていることは前にも述べた通りである。街の中心部のアートショップに書道道具が置いてあれば、書道を始められることを真剣に検討していいかもしれない。書道を始められることになっても先生につくわけではなく、自分なりの方法で書道を楽しんでいく。幼少時代に書道を習っていたこともあり、基礎的な事柄は身につけているだろうし、その時の感覚がまだ残っているのではないかと思う。

書道を通じて漢字を書くことになれば、昔の日本人が用いていた呪術的な漢字を復元するかのよう描いてみたい。自分の気を漢字に込め、そこから文字本来が持つ呪術的な力を立ち込めさせるのである。そのようなことをしてみると面白いかもしれない、ということを考えている。

今日もまた作曲実践に大いに打ち込んでいこう。昨日から、手持ちの理論書を読み進めながら、そこに掲載されている譜例を基にして短い曲を作り始めた。グスタフ・クリムトやエゴン・シーレが膨大な数のデッサンを通じて大量の習作を残しながら絵画技術を高めていったのと同様に、デッサン的な曲を大量に作っていくことを通じて作曲技術を高めたい。

とにかく、今このようにして文字を通じて自分の考えや感情、そして内的感覚を自然に表現できるまで作曲技術を高めたい。それは理想であり、望みでもある。それが実現の道を歩むにつれて、どこかで言葉よりも曲を通じての方が自分の内面世界をより精密に表現できるようになるだろう。

今日の作曲実践で参考にする理論書は、転調に関するものと、モードに関するものである。それら二冊を用いて、掲載されている譜例に自分なりにメロディーをつけたり、コード進行に工夫を凝らしながら曲を作っていく。転調に関する書籍はコンパクトであるから、来週の土曜日から始まるヴェネチア旅行に持っていった方がいいかもしれないと考えている。今日はどのような曲が生まれるのか、それが今から楽しみだ。フローニンゲン:2019/11/2(土)06:13